

みなさん、こんにちは。校長の合浦英則です。今年度も様々な名言にちなんだエッセイをお届けします。これを通して何かしら感じてもらえたら嬉しいです。さて、今年度の第1回は…

「でも」が100個揃えば開くドアがあればいいが、はっきり言って、ねーよ、そんなドア!!

羽海野チカ『3月のライオン』

「ヤングアニマル」に連載されている羽海野チカさんの漫画。主人公・桐山零は、幼い頃に事故で家族を失い、心に深い孤独を負う17歳のプロの将棋棋士。東京の下町に一人で暮らす零は、あかり・ひなた・モモという3姉妹と出会い、少しずつ変わり始めていきます。
(文科省HP『3月のライオン』×文科省コラボレーションページ]紹介文から)

対面式も済んで、240 名の新生生の皆さんには三条高校の雰囲気が少しは伝わったことと思う。新生生ばかりではなく先輩たちも、新しい生活に、そして新しい自分にチャレンジしてほしい。

そこで今回は、僕の大好きな漫画からの名言を紹介したい。この『3月のライオン』は、僕が何かもやもやしたときに読む漫画で、何度読んでも人としてのあり方について気付かせてくれる僕にとってはとても大切な漫画だ。本校図書室にもあるのでぜひ読んでみてほしい。

さて、主人公桐山零は、15 歳でプロ棋士になり 1 年遅れて高校に入学。周囲になじめず孤独に学校生活を送るが、担任林田先生はそんな彼を時に励まし時に突き放しながら、温かく支える。将棋の世界でも孤独である桐山は将棋の研究会に入ることをためらっている。そんな彼に向かって言った林田先生の言葉がこれ。

「でも」が100個揃えば開くドアがあればいいが、はっきり言って、ねーよ、そんなドア!!

今度は僕の話。僕は高校時代、新聞部だった。全道大会で入賞もしたのだからそこそこ頑張ってたと思う。でも実は1年生の冬に途中入部したクチ。本当は初めからやるつもりだった。対面式の部活動紹介で新聞部に入部すると受付用紙に名前を書いたのに、後で本当にやれるのか迷いだした。怖じ気づいたんだ。田舎から一人で都会に出て周りがみんな優秀な人に見えて、「勉強についていけるのだろうか…」と不安で一杯になって、すぐ担任の先生に「入部やめます」って伝えた。部室に直接行かないで担任に言うほどに臆病だった。その時の自分を納得させたもう一人の自分は「でも」と「だって」を連発していた。「でも誰も知っている人いないし…」「だって勉強が優先でしょ…」

結局、学校と下宿を行ったり来たりするだけの生活に疑問を感じ、改めて入部することに決めたのだった。いざ入部してみると1年生は僕だけで先輩たちはめちゃくちゃ優しくかったし、勉強だって両立は十分できた。むしろメリハリがついて良かったくらいだった。どうしてあの時、ドアを開けなかったんだろう。思い返す度に臆病な自分が嫌になる。でも、遅れはしたけど、その後自分でドアを開いて一歩を踏み出したから今の自分がある。

新しいことをやるには勇気が必要だ。自分の知らないことをやるのだから、誰だってためらう。失敗なんてしたくないに決まってる。だからといって何もしないのでは、同じ場所にしかいられない。わからないことをやってみるもののワクワク感、ドキドキ感。そんなものを楽しめるといい。もちろん自分一人じゃどうすることもできないことだっていっぱいある。そんな時はきっと誰かが助けてくれる。世の中は決して甘くはないけど、思っているよりひどくもない。

『3月のライオン』でも、林田先生は別の場面で桐山に向かってこう言っている。

「そうやって力をかりたら 次は相手が困ってる時 お前が力をかけてやればいい 世界ってそうやってまわってるんだ 一人じゃどうにもならなくなったら誰かに頼れ —— でないと実は誰もお前にも頼れないんだ」

人は頼り頼られて人となる。

